令和４年６月３０日

学校だより

７月号

横浜市立美しが丘東小学校
学校学校長　　藤本　光子

ホームページ　http://www.edu.city.yokohama.jp/es/utsukusigaokahigashi/

子どもの心の声

校長　　藤本　光子

「コスモスは　台風おそれ　いのちがけ」

これは、本校５年生児童の作った俳句です。国語の「日常を十七音で」という学習の中で生まれました。この俳句から、どんなことを想像されるでしょうか。私には、台風で倒れそうなコスモスのことを思う、やさしい心の声が聴こえてきます。作者は小さな「いのち」にも目を向けられる感受性豊かな子ではないか、そんなことを考え、強く胸を打たれました。

「俳句とは、五・七・五でまとめるもの。季語を使い、比喩や倒置法も使いましょう。」と教師が一方的に知識を教えるのは簡単です。ですが、肝心なのは、子どもが、子ども自身で伝えたいことを探し、俳句で表現するおもしろさに気づいていくことです。そこには知識だけでなく、関心や意欲、思考力も関わってきます。ですから、子どもがどんなことを伝えたいのか、心の声を大切にして授業を進めていきます。

「(伝えたいことが)何も思いつきません。」という子どもも、実は少なくありません。それは、子ども自身が自分の心の声に気づいていないだけなのです。そんなときに、教師や友達が手伝いながら、自分の心の声に気づかせていくことも、授業の役割です。

例えば、こんな場面を見かけました。動物のゾウを好きな子が、ゾウの俳句を作りたいという思いをもったのですが、季語を何にするか迷っていました。その子は、ゾウの優しいところが好きだと言います。そこで、ゾウの優しさが伝わる一番ぴったりの季節はなんだろう、と問いかけてみました。てっきり春を選ぶと思ったのですが、その子は冬を選びました。できた句はこうです。

「ふゆのぞう　せなかに雪が　つもってた」

のんびりと穏やかに動くゾウの様子が伝わってきませんか。

子どもはいつも、心の声を発しています。そして、授業とは、教師がありのままの心の声を拾い、また、子どもたち同士が心の声を拾い合えるようにし、様々な心の声を認めることを大切にする場だと思っています。

最後になりましたが、運動会や土曜参観では、たくさんの保護者の方々が分散という形をご理解くださり、感謝申し上げます。暑さも耐え難い毎日が続いておりますが、引き続き感染症対策、熱中症対策にご協力いただきますようよろしくお願いいたします。